

第2回植栽樹木検討専門委員会 議事録

平成22年8月10日
13時15分～14時50分

資料1: 未来の森林の姿、森林づくりの手法(案)について説明

<事務局>

先回、委員会で、植樹予定地の森林づくりの方向性を示す様依頼があった。
委員会における発言を聞きながら、たたき台として作成した。

資料2: 第64回全国植樹祭の植樹方針(素案)について説明

<事務局>

先回、委員会で、ご指摘いただいた事項に基づいて、植樹方針の記載を変更した。

議 事

<佐野委員長>

現地を見た結果、花回廊は、かなり成林しかなり発達した状態。低木層も豊富で。放置しておけば常緑の広葉樹と落葉の広葉樹が混交した森林になる。広さは充分。問題点として、クヌギの植栽地を見たが、残存樹木の本数が非常に少ない印象。もっと樹木を残すべきだ。森林づくりの方向が、里山的に利用しながら、管理していくということ。これから管理を続けていくという前提で、ナラの仲間を植えるというのは、部分的には良いと思うが、基本的には周りの自然状態でも成林できるようなものはそれを生かしていくべきだ。

鏡ヶ成は、いわゆる自然を破壊された場所というイメージがあったが、以前はススキ草原だったそうで、火入れはしていないとのことだが、大昔は火を入れていたかもしれないし、少なくとも刈り取りは行われていて、いわゆる茅場として利用された場所を放置されてできた場所で、成林していない。低木が非常に多い。高木種としては、少数ながらカエデ類や、周りにはミズナラもあるという状況。森林づくりの方向は、なるべく自然状態に戻していくという方針。

花回廊でどのような樹種が確認できたか。

<藤原副委員長>

クヌギを確認。クヌギに変わるものとして、アベマキがリスト入りしているが、県東部のシイタケ生産者はアベマキを嫌っている。シイタケ原木として、クヌギと比較した場合、アベマキは、長持ちするが、皮が厚すぎて、発生が良くないという評価。アベマキは、樹種自体が表日本向き。岡山県に多いが、日本海側にアベマキは持ってきたら良くないという風潮もある。クヌギの自生は確認した。かなりの大木だった。ホオノキもたくさんあった。タムシバはコブシと一緒に。山にあるのがタムシバで、家庭の庭にあるのがコブシ。タムシバとコブシは、厳密に言えば分けないといけませんが、生産する方から言えば、タムシバに加えてコブシも植えた方が良い。

ヤマガキも確認できた。

<佐野委員長>

マルバマンサク。クサギ。シロダモ。クマノミズキ。タラノキ。ガマズミ。アオハダ。小さなゴンズイを確認。

<吉岡委員>

アベマキはここでは見つからないが、伯耆町丸山地区にたくさんある。溝口の米子道沿いの山中には自生。アベマキを伯耆町でももう少し増やそうと呼びかけたとき、イノシシが大好物であるため、同意が得られなかった。ドングリとして子供に捨わせるのはとても良い材料。

<山本委員>

クヌギに比べてアベマキのドングリは大きい。イノシシにしてみれば、腹持ちが良いのでは。アベマキは乾燥するようなどころによく生えている。海岸線沿いの特に尾根筋等、水が無くても生育できるような印象。

<吉岡委員>

花回廊の植樹予定地は、子供たちや一般の人が入りやすい場所で、割と近いということでもあるが、森林づくりの方向に記載してある様に、わざわざ紅葉を見に行く場所ではない。大山に行けば紅葉はたくさん見ることが出来る。そうすると、里山独特の森林のリサイクルに叶ったような里山を作ってやるということになるのではないか。

<佐野委員長>

それもひとつだが、ああいう低い所に、自然林があるというのは逆に珍しい。高い所にはある。本来なら常緑広葉樹になる様な場所が、かなり広い面積で落葉広葉樹で残っているのは珍しい。その辺は残すべきかと思う。その中の一部を使って、里山的な利用の仕方をするというのが一番理想的。

<吉岡委員>

今日歩いた所は非常に良かった。明治神宮の参道を歩くような雰囲気整備する。立派な木はたくさん残り、昔からの木がたくさん残っている。あのアプローチは残さないといけない。人が入れるように整備。舗装はしない。

<佐野委員長>

具体的に地図を見て、ゾーニングをしないとイケない。全体を整備してしまっはもったいない。

<吉岡委員>

残す所は残して、利用できるものは利用する。そうしないと放置される。

<佐野委員長>

百年、二百年放っておけば立派な森林になると思う。あえて人間が介入するということは、里山的な利用をし続けるという場所を作るということ。それを全面でやることは無いと思う。

<山本委員>

利用しないと良い山はできない。田舎でも、風呂は薪で焚いて沸かさないし、ご飯は電気で炊く。毎日国府町の山奥まで通勤しているが、夕方に薪を焚いて煙の上がる家は少数。薪の採取等、利用されずに放置されて里山が荒れてしまっているという現状がある。昔はどの家も争うように枯れ枝を拾った。台風が来たら山に行って薪を背負って降りてきた。それでこそ里山が維持できた。若い人たちはそれを知らない。実際に山に行って、木を切って焚き物を作ってというのは、至難の業。私は、焚き物で生活するし、風呂や冬はストーブを使っている。薪がどれだけあっても足りない。山を持っていないので、枯れ木があれば、もらって来て、それを槓にする。大震災があって、公園で風呂をたいたりご飯を炊いたりというキャンプ生活のような状況になれば、里山の薪を拾っての利用が進み、近辺の山はキレイになると思うのだが、日本中の利用人口を支えるほどの燃料には不足しているのが現状。里山管理の体験をする場所を提供するということで、子供たちに山を守っていく、使っていくから里山は維持できると教えることが出来る。うかつに荒れ放題の山に入っていくと、泥棒していると必ず言われる。花回廊まで来てそういう体験ができるのであれば、すごくありがたいことで、山を持たない人ほどそういう体験がしたいと感じる。山を維持するための森林づくりをしたら良いのではないかと思う。

ナラ枯れの影響でナラ類は、枯れることがあるかもしれないが、そういう時代だからこそ、更新木、次の時代を育てていくということも大事なのではないか。

スギやヒノキは、十分に植えなくても良いと言われたりもするが、輸入外材が入ってこなくなって、徐々に売れ出してきている。日本の森林にも目がいくようになっていくと聞く。スギもある程度育てる山造りも大事なのではと思う。

ただし、今回の山にはスギ、ヒノキは合わない。

<池本委員>

植樹予定地へ柵を解放した状態で放置しておく、ゴミ捨て場になりかねない。常に人が入っているような山にするために、里山の手入れをするような人に加えて、花回廊からそのまま歩いていける距離でもあるので、特徴のある花やそこにしかないもので楽しめる様な植栽にしたらどうかと思う。ただの樹木園というよりも本当に珍しい、アオハダ等を植栽する。

<藤原副委員長>

アオハダは、2年間の養成では不十分。植樹祭に間に合わない。

鳥取県試験場が開発してパワー松。マツノザイセンチュウに強いアカマツが開発されたが、県民に周知が不十分で植林に使われていない。植樹総面積の1/3くらいはパワー松を植えて「花回廊に行ったらあそこの松は枯れていない、これは何だろう」、という時にこれは松食い虫にかからない松です、と自然に宣伝がしていただけるような森林として欲しい。

冒頭、委員長から、クヌギ造林の残存樹木が少ないとの指摘があった。今の倍以上の樹木を残して植栽すればおもしろい山にはなる。その中にできればパワー松を植えてもらいたい。

<上原委員>

こちらに来て松が無いなどずっと思っていたが、キレイなアカマツを残して、ここにしか無い花を、そこに行ったらこれが見られる、というのもひとつの魅了かなと思う。

<吉岡委員>

アカマツのすばらしさは確か。大山の丸山地区にはみごとに残っている。立派なアカマツを残すことが、住民の哲学でもある。

植樹する場所は決まっている訳だが、植えたは良いが人が見向きもしないものにならないようにするにはどうしたらよいか。地元には大山があるのに、何故そんなところに植樹をと言われてはならない。森林を本格的に利用する20年先を考えた時に、世の中は変わってきて薪ストーブにしようとか、そういった人たちも沢山いる時代になるのではないか。クヌギやコナラ、クリ等を植栽しておいて、一年に一回開放して、伐採してもらおう。最初、植栽後、伐採できるまでに20年は必要だが、一度伐採後、今度はぼう芽が利用できる。12年サイクルで次々伐採提供できる。

<塩永委員代理 鳥取森林管理署・小森次長>

大山のふとこりにいだかれる里山というのは、私イメージがスッと浮かんで来ないというのが、正直な所。里山は、山だけでなく田んぼもあれば、川もあるセットで考えるべきものと思っている。珍しいものを植えて特化したものでもこれは一つの案なのかなというような考えもいろいろな疑問の中で、迷っているところ。

<吉岡委員>

大山のキャンプ場は利用者が減少して閉鎖となった。植樹する森林は、皆が来て、利用出来るという所でなければならない。一年に1回くらいは、多くの人がやってきて薪を持って帰れる場所にする。里山の利用はしいたけ原木とそれくらいしかない。

<藤原副委員長>

植樹祭の山づくりはイベントなので、皆が行って綺麗な山だと感じる必要がある。目で見て綺麗だと、それから山に入って気持ちが良い。そういう山にした方が良い。

<佐野委員長>

全面的に里山に手を入れて綺麗な森林にするのか、それとも自然を残して周辺を整備しつつという方向か。

<吉岡委員>

通路から奥は植樹。残存木の基準径を決めて、それ以下のものは伐採。残った木の様子を見ながらその後の伐採を考える。

<佐野委員長>

県有地は全部で30ヘクタール。

<佐野委員長>

そのうち今回植樹に使うのは？

<事務局>

2~3ヘクタールぐらいで参加人数的には足るのではないか。ただし、残し木が多いので、区域面積としては5~6ヘクタール。その中で一つのゾーンに入れるみたいな形を取っていくのかなあと感じはします。

<佐野委員長>

30ヘクタールのうちの5~6ヘクタールを利用するとなると自然状態では残る部分がある。最初の理念である生物多様性を考えれば、全面積伐採してしまって、特定の樹種だけ植えるというのは、良くないと思う。自然状態で残せれるものは残した方がいい。残りをどうしようかということで、話を進めたい。

提案あった最大5~6ヘクタールの場所を基準とした太さ、例えば 20~30センチとか、10センチとか決めて、そこをまず刈り取る。で、これでいけるかどうかを見て、これでいけるとなればそれでもいいし、もっと切った方がとなればもうちょっと切つてと、そういうような手順とした。

<藤原副委員長>

低木類は小径。低木類は全部切るのか。

<佐野委員長>

植栽するところはそうなる。

<藤原副委員長>

植栽するところは、低木類をすべて伐採するということだが、このリストにもかなり低木類はある。

<吉岡委員>

今度植えようということに関しては、低木類は植えない。アプローチ道路はしっかり残されたらどうか。そこを大事にするという基本を持ちつつ、植樹にあたって、生物多様性に関してそれも考慮。ある程度の大きさに育ったものは、手を加えない、というやり方で共に大きくさせていこうということかどうか。

<山本委員>

植栽区域の5ヘクタールをどう配置するのか。運動場の様な広場を作ってやるのか。それとも通路沿いにずっと、通路沿いに広げて行って道の周辺部を整備するというやり方でいくのか。あとあとの管理のことも考えてれば、通路沿いに5ヘクタールというのが、整備し易い。

鏡ヶ成は、土壌が浅く、茅場が痩せ地に残っている肥沃な土地だったらもっと樹木が生えてきているだろうとのこと。管理するのが大変なところになるだろうから、しっかりした樹種を選んでくださいとも聞いた。

鏡ヶ成で、浅根性のもので見栄えが良く、花が咲いたり実がなったり、するような樹種を選択するのも大変。土壌は、雨が降って無いときでも水分は充分ある。水があるから木もヤナギ類が生えている。土地が痩せているから周辺のスギも成長が悪い、ということだった。

<上原委員>

花回廊は、通路沿いに5ヘクタール、私のイメージとして、子供や孫を連れて行ってその時期にきれいな花があつたり、紅葉があつたりとかで芝生までは無理かもしれないが、休憩小屋があつてピクニックもかねてでも行けるよう場所にして欲しい。これから先「あれはあの植樹祭の時の森林だな」という形でずっと受け継いでいかれる。奥まった所は、委員長のおっしゃったような植林をして行って、という形でいけば、両方できるのかと思う。

<佐野委員長>

里山としてのナラ林を中心とした植林と花や木が両立するのは良いと思いますが、どうか。

<吉岡委員>

大山の麓に、休憩のできる場所も一杯作っている。それに類似した森林を作っても、地元の人には本当に来るかと思う。私たちも、大山で、桜の名所づくりを別にやっている。

<上原委員>

地元の人は良い景色をいつも眺めておられるから、わざわざそこまで行かないと思うかもしれないが、花回廊にきれいな花畑とはまた違った良さがあれば、良いのかなと思う。大山までわざわざ登ることもできない。遠くから眺めるくらいであとは花回廊に車で横付けして、楽しむということもあって良いと思う。

<佐野委員長>

ちょっと来た時に休憩する場所があっても良いかと思う。

<上原委員>

全域がそうならなくとも、コナラやクリを奥部に植栽。その他にほっとできるような場所が欲しい。

<藤原副委員長>

5ヘクタールもあれば、散策コースは相当な距離が取れる。そういうコースをしたら、子供を連れて歩けば良い運動にもなる。目で楽しんで身体で林の中を歩いて、気分をリフレッシュする。

<事務局>

ゾーン分けをしろということか。

<池本委員>

それは必要。実際整備するときは踏査の上、決める必要がある。

<藤原副委員長>

谷の部分は大きなスギが残っている。あの辺は残したままで、散策コースは作れば良い。

<事務局>

詳細図面が無いです。道はかなり入っていた。ああいったもの詳細な図面にできれば、もう少し進んだ論議ができる。どちらにしても原道はうまく利用しながら、考えていかなければならない。

<山本委員>

花回廊に残っている山はすごい痩せ山というイメージがあるが、今日のところは木も大きかった。

<藤原副委員長>

鏡ヶ成はもっと肥沃で、茂っているかと思ったら、何も無い状態。想像とは逆。

<佐野委員長>

花回廊の整備方針を決める。いわゆる里山としての利用というのをメインにすると、残りの部分は、このまま自然林として多様性の高い森林として生かす。できれば身近で花のきれいなものも同時に植えて、薪やシイタケ原木を取ったりする場所だけではなく、少し楽しめるようなものも植える。アカマツはどうすべきか。

<塩永委員代理 鳥取森林管理署・小森次長>

品種改良したわけではなく、抵抗性がある松だ。

<池本委員>

西伯周辺からも採取したものがある。遺伝子攪乱の心配はない。

<佐野委員長>

アカマツは枯れると遷移が進んで常緑広葉樹に変わっていったりするので、それを見させるという意味ではすごく良いと思います。ただ、アカマツを植えるとすればもう一度伐採して、土壌もあまり豊かだと良くないので、土壌も少しはぎ取ったりして植えないとうまく育たないと思う。

<池本委員>

そのことは、ちょっと痩せているような場所を選んで、植栽すれば、表土を剥ぐようなことまでしなくとも、大丈夫なのではないか。

<佐野委員長>

赤松の稚樹も生えていたので、見本林的に植えるのは良いと思うが、やはり、メインは、ナラの仲間とした方がよい。

<佐野委員長>

鏡ヶ成の整備方針。鏡ヶ成はどちらかというと自然に戻すという、復元という観点からどうするかということ。

<池本委員>

鏡ヶ成は、ちょっと土地が変わっている。かなりしけていた。解放地で日当たりも良く、乾燥系の土壌だと思っていたがそうでもない。ちょっと樹種選びが大変なのではないか。ただ単純に、鏡ヶ成周辺に自生する 88 種類のリストから選択するよりも、現地周辺で自生しているものを植栽した方が成功すると思う。

<佐野委員長>

鏡ヶ成のリストを見て、これ以外で中で見た物はあるか。特に多かったカエデ類。一番多かったのはウリハダカエデ。他に多かった物はタンナサワフタギ、タニウツギも沢山あった。大径のイタヤカエデもあった。

<吉岡委員>

山として植物構成が単純。最近まで茅場だったということ。

<佐野委員長>

あそこはブナも生えるか。

<吉岡委員>

擬宝珠(ギボシ)山付近までは一帯がブナの林。胴回り4メートルくらいの大木がたくさんある。

<佐野委員長>

ブナを植えても育つか？

<吉岡委員>

十分育つ。その他近くにはミズナラの純生林。イタヤカエデとミズナラの林。ウリハダカエデの林。サワグルミの大径木がある。元々はこの烏ヶ山の斜面は自然がまともに残ってる場所。この鏡ヶ成めがけて開発がされてこういう状態になってしまった。元々はミズナラとブナの中にあっただころ。

<佐野委員長>

植栽樹の中心はミズナラとして、ブナ、ミズキだとか他の樹種を加えることでどうだ。

<吉岡委員>

カエデもある。ミズメの大径木も沢山ある。

<藤原副委員長>

ミズナラの古木があった。近辺が適地。土壌は浅いかも分からないが、たぶん植えたら育つと思う。

<吉岡委員>

放置しておいても育つのではないか。

<藤原副委員長>

茅の株が沢山あった。どうすればよいのだろうか。

<吉岡委員>

刈り払っただけではだめだ。株が残っている。

<藤原副委員長>

植樹祭の参加者で、素人には、唐鍬を使って掘ることができない。

<吉岡委員>

ユンボで掘り取っておかなければならない。

<佐野委員長>

結構、岩もゴロゴロしていた。

<吉岡委員>

ブルドーザーを入れても良いと思う。大きな木を残してブルドーザーで1回引っ掻いてもらう。

<藤原副委員長>

ブルドーザーを入れると土壌を固めてしまい良くないのではないか

<吉岡委員>

そうしなければ、山は育たない。

<佐野委員長>

それはやった方がよいと思う。近くに「伯耆の森」という鳥取大学の森もあるが、そこも赤松林を伐採した後に、色々な地表処理をしている。ブルドーザーで起こして、AO層の土壌を除去した所の方が、赤松の更新にはよい。放っておくと、広葉樹が沢山入る。ただすぐにススキは復活してくるので、そこも手入れが必要となる。

<吉岡委員>

桜がもう少しあるべきだ。オオヤマザクラ。蒜山に抜ける道路の先の料金所に見えていた近辺にオオヤマザクラの大木があったということ。そのほかには鳥取大学の演習林に2本残っていたが枯損した。しかし実際にはもっと沢山あったということが分かる。

<佐野委員長>

烏ヶ山に、今は残ってないのか。

<吉岡委員>

残っている。残っているが、ブナが大きくなると、オオヤマザクラは負けてしまう。桜としては美しい。高度の高い所なので、ピンク色のきれいな花が咲く。

<藤原副委員長>

普通のヤマザクラの方が強いのではないか。

<吉岡委員>

オオヤマザクラは強い。300～350年は生きると言われている。

<山本委員>

オオヤマザクラは高いところでないと成長しない。

<吉岡委員>

ホオノキがあった。トチノキもあった。トチノキはもう少しありそうだとのがする。ネムノキが入っているのではないかと思っていたが、入っていない。柵水は、今の時期ネムノキがあちこちで開花している。ここには全くない。

リョウブが一本あった。荒廢地の領域に入ってしまったのか。

<佐野委員長>

明るかったからだろう。

植樹の基本方針としたら、ミズナラを中心として、加えて高木種としてのブナやホオノキ、周辺にあったトチノキ、オオヤマザクラ、ミズキ、カエデ類でウリハダカエデ、イタヤカエデ等を混植する。

<藤原副委員長>

標高が高いために、紅葉を楽しむということで、ナナカマド類を植えたらおもしろいのではないか。標高800mまでの場所には、多くはない。とても紅葉が美しくなると思う。

<佐野委員長>

入れても良いのでは。

<吉岡委員>

ナナカマドは、展望台のところに、沢山ある。どこからか持ってきて植えたものだ。

<佐野委員長>

自然にあってもおかしくはない。

<吉岡委員>

ナナカマドは、荒れ地には入ってくる。ブナやミズナラを伐採すると、生えてくるのは、カエデ類とナナカマドとオオカメノキ。オオカメノキは白い花を咲かして、喜ばせる。紅葉も良い。ムシカリとも言う。今日の予定地は、茅の根が邪魔をして、根付かない状態。ウリハダカエデの種が飛んできた時に根が出る程度。あとの種は寄せ付けない。

<佐野委員長>

先ほど言ったように、掻き起こしを行えば、多分自然状態でもかなり入ってくるだろう。低木も生かした方がよいとの記述があったがどうすべきか。

<吉岡委員>

ウツギをどう扱うかということへの対応は重要。放置しておけばいくらでも繁茂する。

<藤原副委員長>

ウツギは1回伐採整理して、次に萌芽してきたものを、大きくした方がよい。最初から残すよりは、全部切った方がよい。

<吉岡委員>

根が残っていると、どんどん増える。

<佐野委員長>

ブルドーザーを入れるのであれば、皆切ってしまう方がよい。道沿いだけは残して、やれば、風が入らない。